第1章

参加青年レポート

参加青年レポート

参 加 青 年 レ ポ ー ト

No.	氏　　名	タ イ ト ル	ページ番号
1	石 井 百 音	国際交流と自分に向き合う	11
2	井 上 舞 香	チームワークで作る青年交流	12
3	上 田 昂	日中ハーフとしての使命「日中の架け橋」とは	13
4	牛 川 太 郎	中国研修における学びと今後の展望	14
5	大 倉 成 童	他者と「上手くやる」ということ	15
6	尾 迫 志央理	貴重な学びと成長	16
7	越 智 歩	国際交流の拡がりと外交の場でのふるまい	17
8	加 賀 駿 希	日中青年交流事業からの学び	18
9	加 藤 紀 香	私と中国の繋がり	19
10	菊 池 美 希	日中代表ユースフォーラムを通して得られたもの	20
11	栗 原 加 奈	学びと経験、そして共有	21
12	笹 木 愛	日中関係発展の兆しを求めて	22
13	佐 渡 愛 美	伝える力	23
14	柴 田 唯 矢	国際交流で得られるもの	24
15	釋 の ゝ	事業を通して学んだこと	25
16	中 田 一 平	日中の未来に貢献できる人間に	26
17	原 野 海 華	日中の未来、自分の存在意義	27
18	本 田 舞	日中親善交流事業を終えて	28
19	松 原 風 花	「人」と「人」との交流	29
20	松 本 彩 花	気づきときっかけで、みんなを変える	30
21	山 口 幸 輝	中国の青年の行動力を見て自分も	31
22	湯 澤 里 桜	他国との適切なコミュニケーションの取り方	32
23	リム　レイチェル　シーワイ	日中関係と私のアイデンティティ	33
24	渡 邉 花	日中交流事業の学びと今後の活動	34

国際交流と自分に向き合う

石井　百音

私は事業に参加することを通じて、国際交流に必要なものとは何かを考えるとともに、自分自身の今後を見つめ向き合うことができた。

日本と中国の関係は、今年で日中平和友好条約締結45周年という節目を迎え、重要な岐路に立つ。長い歴史を振り返り、平和友好の維持と共同発展を望むうえで、国際交流による相互理解は必要不可欠である。そのような中で、私たち青年が担う役割は大きい。

今回は、文化・デジタル経済・気候変動・教育・少子高齢化という五つのテーマをもとに交流が行われたが、中国青年の各分野への理解の深さと対応力は共通点として挙げられるだろう。文化班の意見交換会では、個人的に自主的な学びにより、中国青年の考えの背景には何があるのか、根拠は何かを垣間見ることができ、事前準備の量と質の重要性を肌で感じられたことが印象的だった。一方で、事前準備や相互の発表を通じて、知っているつもりでも一面しか見えていなかったことを恥じ、自国や相手国に関することに対してより一層アンテナを立て、自分ごととして捉えるべきだと感じた。文化に限らず、どんな物事もつながっていると考え色々なことに興味を持ち、多様な視点で物事を立体的に考えることが大切だと実感した。

そして、事業全体を通して「自分自身のありたい姿」を繰り返し考える中で、初めは曖昧だった輪郭が明瞭になった。中国青年だけではなく、初対面かつ様々なバックグラウンド、年齢、地域も異なる他の日本青年との交流も、まさに異文化交流のようなものであった。それぞれが自分の役割やチームで発揮できることは何かを模索し、限られた時間と情報の中でお互いを補い支え合いながら取り組んだ。

目標としていた「しっかりと自分の意見・考えを持ち伝えること」は、思い浮かんだ問いや疑問を掘り下げ、自分はどう考えるのか、相手の立場であればどう考えるのかを意識して発言することができ、成長につながったと考える。加えて、事業の振り返りで自身の目指す姿とした「ムードメーカーとして雰囲気を和ませ円滑に物事を進めるとともに、他の人の良い部分を吸収しつつも、芯を持って自分の考えや主張を伝えられるしなやかな人」になれるよう努力していく。

今後は、文化振興に携わる身として、受け手側から生み出す側に回ることになる。国内外の文化を知ってもらい、親しみを感じてもらえるようにSNSやメディアといったフィルター越しではなく、体験を通し、それぞれの国の多面的な魅力を伝える異文化理解の機会を創造したいという気持ちがより一層強まった。実際に直接触れる・交流することで、マイナスのイメージを持つ場合や無関心な場合も新たな人や情報との出会いによりイメージを肯定的なものへと変えることができるはずだ。「共鳴の仕方は世代によって異なる」というように、交流の内容をより多彩なものにする必要がある。そのためには、自分自身の知見をアップデートしつつ、視野を広げることが求められる。物事を成し遂げるための原動力となる「想い」はかけた熱量に比例するという。自分の行動が日本と相手国の相互理解や友好関係の増進の一助となる意識を持ち、現在だけではなく、これからを見据えて文化の和・環・輪を広げる一歩を強く踏み出していきたい。

国際交流の発展は、日本への理解と信頼の促進ひいては円滑な外交政策の実施に大きく関わる。私たち一人一人が出来ることを行動し継続することが大切である。どんなに小さなことでも草の根活動がもたらす効果は大きい。未来に何を残したいか、そのために私たちに何ができるのか、次世代につながることを意識して、歩みを止めることなく取り組んでいきたい。

チームワークで作る青年交流

井上　舞香

私は名古屋から本事業に参加した。私が本事業で特に印象に残った経験は、交流会事前準備から事後研修までのチームワーク力だ。このように感じた理由は三つある。

一つ目は交流会までの事前準備だ。交流会前に私たちは計４回のミーティングを行った。その中で、リーダーを筆頭に全てのメンバーが意見を出し合い準備をした。皆が全ての役割を自分ごととして捉え、交流会の流れをしっかり把握できるよう議事録を細かくまとめ、忙しい中でも時間を作り夜中まで話し合いを続けた日もあった。

二つ目は交流会当日に任された役割と責任をそれぞれ果たしたことだ。当日まで交流会の流れを予測できず、中国青年の意見も取り入れながらタイムキープをすることが私たちの困難だった。しかし、チーム全員がそれぞれの役割を全うし、当日はスムーズに会を進めることが出来た。私は司会とファシリテーターの役割で、翻訳の時間もスムーズにいくように原稿の文の区切りを予め決めておき、本番前に何度も練習を重ねた。また、ファシリテーターとして相手の立場を尊重し、日本青年と中国青年の中立的な立場として会を進められるよう努めた。

そして三つ目に事後研修での振り返りだ。ワークショップの中で、それぞれのキャッチコピーとその人の特性を振り返ることで、色々な場面で自分がサポートされていたことを強く感じられた。また私の長所の一つとして、人の良い所に着目することが習慣化できているので、このワークは私が感じた皆の長所を直接伝えられるという点で、非常に有意義だった。全員に共通していたのは、チームのために動くという優しさであった。その気持ちをもとに、それぞれの長所を発揮し一丸となったチームであったことが非常に嬉しく、私もこのチームで良かったと感じた。

これらの体験により私は、主体性を持ち自分がチームでどの役割をどのように果たしたらいいのかを学び、考える力を養うことができた。また、事後研修でお互いの長所を見つけ、賞賛し合えることは交流会を終えるまでの各々の頑張りを認め、自覚できる素敵な場であった。約２時間半という本番の交流会までにチームで何度も話し合いと練習を重ね、悔いなく本番を終えられた私たちのチームワーク力は非常に強く、とても印象的な経験となった。

これらの経験を通して、私は将来成し遂げたい二つのことがある。

一つ目は日本と中国を繋ぐ人材となることだ。今回の研修を通して、私はやはり中国の文化や中国人の考え方や価値観を知ることが非常に好きだということを改めて実感した。私は現在大学３年生で、今後も専攻である中国語の学習を絶えず進めていく。その中で今回の経験を軸に自分が中国と日本をつなぐ役割として、最適な方法をこれからも模索していきたい。

二つ目は、人の心を守る人材となることだ。こう感じたのは、事後研修の振り返りワークだ。私が周りからの評価で受け取ったキーワードは「優しい」であった。優しさとは何か考えさせられたが、それは素の自分でいることだった。普段の自分でいることが、周りから評価され、あるべき姿なのだと感じた。会社、学校、人と過ごす時間の中で、相手を思いやり、相手の立場になって主体的に行動することは大切だと考える。素の自分でいることでできていることもあるかもしれないが、これからは意識的に相手の意見を傾聴し、考えを尊重できる人材となりたい。

具体的な事後活動として行いたいことは、同世代の若者に私の得られた経験を話し、今後の日中交流のあり方について考えてもらい、「自分も参加したい。」、あるいは「参加できるかもしれない。」と自信を持ってもらうことと考えている。行動としては、まずは大学の中で国際交流施設があるので、そこでこのイベントの紹介や私の経験を話す事ができればと考えている。また、私は中国語のゼミに所属しているので、後輩たちのゼミの時間に少しお話しできればいいと考えている。私自身もゼミを通して先輩からこの事業のことを伝えられたため、次は私が広めていきたい。

日中ハーフとしての使命「日中の架け橋」とは

上田　昂

今回の事業に参加したことは私の人生においてとても大事な１ページとなった。私は日本人の父と中国人の母の間に生まれ、中学校を卒業するまでの 15 年間を中国の天津という都市で過ごした。そんな私は幼少期の頃から、「いつか将来は『日中の架け橋』のような存在となる人になりたい。」という目標を抱いていた。しかし大学生となった今、改めて「日中の架け橋」とは何か、どんなことをすれば日中の友好関係を促進できるのか考えるようになった。記念すべき日中平和友好条約締結 45 周年の年に日中交流を促進させる活動を行いたいと思うと同時に、その答えを探るべく私は今回の事業に参加した。振り返ってみると、今回の事業を通して、知らなかった中国を知ることができたと同時に、新時代においての日中交流を行う青年の役割など多くのことを学ぶことがきた。

特に事前研修や交流会当日の先生方の講演はどれも印象に残っていて、多くの学びを得ることができた。事前研修の講演では、中国の独特な社会システムや圧縮型発展について学び、中国で生まれた自分も知らなかったようなことを知る貴重な機会となった。また、当日の交流会の準備として中国の面子文化についてもお話いただき、国際交流を行う時にそれぞれの文化に合わせたコミュニケーションをとる大切さにも気付かされた。そして交流会当日の基調講演では、日中交流を行う上で大事なことを学んだ。自分達が信じていることが常に正しくて、他は全て間違っているというような決めつけを持つのではなく、自分と異なった意見にも耳を傾けることが大切であることを改めて実感させられた。

その他にも、当日の意見交換からも学びを得ることができた。私は教育班に所属し、中国青年に経験教育として日本の学校で学生自身が教室の掃除を行う掃除文化について紹介した。意見交換を行う前までは、中国には学生自身が掃除を行う文化はないと思っていたが、実際は存在しているが日本ほど浸透していないだけであることを知った。このように、交流会を通して自分が知らなかった、あるいは勘違いをしていたことを知ることができ、誤解やステレオタイプな考えを正すことができた。これだけでも今回の事業に参加した意義はあり、さらにはチームワークでの協調性や、問題解決力を身につけ、一人の人間として成長することができた貴重な機会となった。

そして今回の事業に参加したことによって、今後の事後活動につながる大きく二つの報酬を得ることができた。

一つ目は、「日中の架け橋」を大きく捉えすぎていたことに気付けたことだ。今回の事業は国同士のオフィシャルな国際交流だったが、日本と中国の友好関係を促進させるには、私が所属する日中学生交流団体や個人間によって生まれる小さなつながりをさらに増やすことが大事だと思う。規模は小さくなるが、オンラインで中国の学生と日常生活について話したり、対面で言語の壁を超えたミニゲームを行なったりすることも立派な国際交流で、そうした小さなつながりが日中の架け橋を構築するのではないかと思うようになった。

二つ目は、改めて自分の興味・関心が日中交流の活動にあり、自分の活動を通して日中交流の輪をさらに広げていきたいと思っていることを再確認したことだ。今回の事業に参加したことにより、私は改めて日本と中国両方の血を持つ日中ハーフとして、日中交流に貢献し、「日中の架け橋」となる使命を感じた。一見大したことのないように思えるが、自分と同じように中国に興味のある青年たちと日中交流を行ったことによって、自分の将来の選択肢として「外交官」となり日中の友好関係に貢献したいと強く思うようになった。

よって事後活動は、日中の友好関係に貢献したい思いを行動に移すべく、来年度の在外公館派遣員制度に挑戦したいと考えている。実際に派遣員として中国で仕事をして、さらに中国についての理解を深めて日中交流を促進し､「日中の架け橋」の幅を広げていきたい。そのためにも、今後もさらに所属している日中学生交流団体の活動に力を入れていき、学生のうちに小さな繋がりをたくさん構築していき、相互理解を促進するきっかけを多くの人に与えていきたい。

中国研修における学びと今後の展望

牛川　太郎

1. 体験の印象

この国際協力プログラムに日本代表として参加したことは、私にとって一生の記憶に残る貴重な経験であった。日本代表としての参加は、個人としてでは決して経験することのできない、国際レベルでの交渉や協力の場に身を置く機会を提供してくれた。異なる文化背景を持つ参加者との交流を通じて、多様な視点やアプローチを学び、自らの思考を広げることができた。また、中国青年との議論は、国際問題に対する深い理解を深める機会となった。特に IT 分野に関しての知識や考え方への理解がより深まった。

私は国際社会における日本の役割や責任についても考える機会を得た。さらに、文化の多様性やグローバルな課題に対する異なるアプローチを理解することで、より広い視野で物事を考える力を養うことができた。個人ではできない、政府を通して行うという経験ができたが、お互いの共通の言語である国際言語の英語を用いてのコミュニケーションを行う方がより良いコミュニケーションができるのではないかとは思った。自分の語学力も大学生の時に比べてあまり成長をしていないので日々勉強を重ね、コミュニケーションを主体的に取る必要があると感じている。ディスカッションを中国青年と深めることができなかったことが非常に残念である。IT に関してのディスカッションであったが、先方があまりその趣旨を理解していない、準備をしていない部分が散見された。その点が非常に残念な印象を受けた。

2. 学びと成果

① プログラムにおける活動を通じて、自己の能力を最大限に発揮することができた。特にプレゼンテーションやグループワークでは、自己の意見を積極的に表明し、他者の意見を取り入れる柔軟性を持つことの重要性を再認識した。ただし、より多くのディスカッションの機会を設けることで、参加者の間での意見交換をさらに促進できたのではないかと感じる。また、異文化間のコミュニケーションや協力における課題を具体的に理解し、それらを乗り越えるための戦略を学ぶことができた。

② プロジェクトの進め方や効果的なプレゼンテーションの作成方法に関して、自分の経験や知識をチームメンバーに共有し、チーム全体のパフォーマンス向上に寄与することができた。この経験は、今後の職業生活においても役立つだろう。グループ内でのリーダーシップの発揮や、チームメンバーのモチベーションを維持する方法についても学ぶことができ、これらのスキルは今後のキャリアにおいても非常に重要な要素であると確信している。

3. 今後の活動への応用

今後、所属する組織や地域において、このプログラムでの学びを活かしていきたい。特に、個人としての海外での活動や、仕事を通じての国際的な関わりを深めていくことを目指す。また、国際協力の分野への積極的な参加を通じて、地域社会や組織に新たな視点をもたらし、国際的な協力関係の構築に貢献したい。このプログラムは、国際的な視野を持ち、多様な文化や価値観を尊重する重要性を教えてくれた。これらの教訓を活かし、将来的には国際的なプロジェクトのリーダーとして、より大きな影響を与える活動を行っていきたいと考えている。このような国際的な経験は、私の専門分野である地域創生の分野においても非常に重要であり、将来的には地方から海外へというテーマで取り組むことを目指している。

また、お金を稼いでいくことで非常に継続的なコミュニケーションができると思う。日本の会社も社内公用語を英語にして、よりダイバーシティな環境を作るべきである。

自分の価値観が、社会人となり同じ会社で働いていると狭まってしまうことがある。より知識を深め、意見ができる大人になりたいと思う。

他者と「上手くやる」ということ

大倉　成童

参加した目的

私はこの事業に、日本側の代表青年の一人として参加した。参加した理由は主に三つある。一つ目は中国文化への興味の掘り下げと中国人との交流である。高校時代から中国に関する文化・思想に興味があり、その興味を中国青年（あるいは中国に造詣の深い日本青年）との交流を経て深めたいと思った。二つ目は、リーダーシップの育成である。小中高の学生生活の中で、人前に立つ仕事をこなしてきたが、今度は社会人も含めたコミュニティの中でさらにレベルの高いリーダーシップを身に着けたいと思った。三つ目は、コミュニケーションの力を磨くことである。従来の私のコミュニケーション方法では、話す相手が非常に限られてしまい公共の場で話題を発展させることが難しかった。そこで内閣府が後援するこの公共的な場で、自分のコミュニケーション力を高めたいと強く思った。

体験と印象に残ったこと

自らの体験を大きく分けると、中国青年たちと交流した当日より以前、当日、そしてそれ以後の３つに分けられる。

交流日以前には、同じ日本青年との交流が主な体験であった。今まで自分が属してきたコミュニティとは異なり、そこでは社会人から同じ学生まで様々な人と触れ合い、話し合い、協力することができた。特に、交流日のための準備を班員と協力して成し遂げた。社会人なら自分が勤めている会社の属性あるいは専門を生かすなど、それぞれ自分が何をできるかを考え実行しながら協力できていた。私はまだ何か専門的な分野を持ち合わせていなかったため、他の班員から専門的なことを聞きながら、自分にできること（タイムキーパーや班内の副リーダーなど）を精一杯行った。この過程で、私の参加理由でもあった、コミュニケーション能力を従来よりも一段高めることができたと思う。つまり、公共の場での会話をどうすればうまくつなげることができるのかを考え、実行した。

交流会当日は、中国青年と自らの現状（自分は現在社会的に何を行っており、今後どう活動するかなど）を報告しあった。ここでは、中国青年の話だけではなく、日中交流の最前線で研究を行っている講師の講演も聞くことができた。この講演は、政治に興味がある私にとって、知的な面での刺激となった。

交流会以後で、特に印象に残ったのは、日本青年間で互いに他人を具体的に客観的に評価しあったことである。そこで私は、改めて他人の目から見た自分の姿と向き合うことになった。やはり、他者からみた自分と、自己が認識する自分とは異なることが分かった。特に私は、言動に「柔軟性がある」と評価された。主観的には、自分の他者への相対の仕方は頑固で不器用な印象を持っていたが、無意識のうちに相手の意見をよく聞き、上手く他者と合わせることもあれば、指摘すべき時は譲歩しつつも指摘するすべを使っていた。これを受けて、リーダーシップあるいはコミュニケーションという面で個人的な成長を感じることができた。

学び吸収したこと

吸収したことを一言で表すとすれば、それは他者と「上手くやる」ということである。オンラインではあったが、この事業には趣味や所属、性格から性別まで全く異なる人間と会話を通して接する機会がたくさんある。そういった「他者」と接する機会に恵まれたことは、コミュニケーション能力を高めたいと思っていた私にとって大きな喜びであった。その中で、いかに公共的な空間つまり他者が集まる空間で、個人が他者とどう接し、会話をつなぎ妥協点を見つけて、事態を前へ進ませることができるか、そのためにどう協力すればいいのかを私なりに見つけ吸収することができたと思う。それは、もちろん一部の日本青年やサポートスタッフの方々を模範にした面もあるが、何よりこの交流事業というイベントを私自身が体験する中で、私自身が考え行動した結果であると信じたい。

今後の目標

今回は、同じ日本というコミュニティ内の他者と接することで多くを学んだ。一方で、中国青年という他者との接触は不十分に終わってしまった。したがって今後は、この他者の定義を拡大し、異なる言語や体つきを持つ他者と積極的に接することで、ナショナルだけでなくグローバルな視点での公共的な空間でどう他者と「上手く」やっていくのか、そのすべを身に着けていきたい。

貴重な学びと成長

尾迫　志央理

この交流事業は私にとって貴重な学びと成長の機会となった。

まず、事前研修の先生方からのレクチャーは、個人的に非常に新鮮で感銘を受ける学びであった。中国人の若者の就職事情や恋愛・結婚観、子育て事情など世代ごとのジェネレーションギャップについて理解を深めることができた。これらは、中国の成長の著しさゆえに生まれたものが多く、現代中国の急速な変化と発展に関する洞察を得るために役立ったと思う。私は今イギリスに大学院留学しており、同じように留学している中国人のクラスメイトと話す機会がかなりあるため、このような背景知識が、実際に中国人と対話する際に理解を深めるのに大きな助けになることを実感している。さらに、他の先生方や同じ交流事業で先輩として経験を積んだ方々からの貴重な話を通じて、日中事業や中国での経験が自身のキャリアや進路に与える影響についてより具体的に学ぶことができ、将来の方向性に大きな示唆を得ることができたと思う。

日中代表ユースフォーラムの午前中の基調講演もまた、日中関係の概略や正しい捉え方について学ぶことができ、両国の歴史的背景や相互関係に対する理解の重要性を改めて認識することができた。さらに、私の日中関係に対する関心と好奇心を刺激し、将来の学びや大学院の研究の方向性に対する関心を高めるきっかけとなった。

中国青年との意見交流会では、少子高齢化グループに入り、日本の少子化の発表を担当した。双方の少子高齢化の現状と政策について紹介し合ったところ、中国の少子化、特に都市部での少子化の現状は、日本と共通点が見られた。興味深かったのは、中国側が日本の高齢化・少子化に関する現状をかなり理解しており、実際、日本の少子高齢化は中国よりも進行しているという点で、日本の政策やアイデアを学んで自国に適用しようとする積極的な動きがあったことである。このような両国間の知識交換は、両国が直面する共通の課題に対する理解を深めるとともに、互いの政策や解決策について学び合う貴重な機会となった。

事後研修では、プログラム期間中のチームメンバー同士がお互いに印象や長所を共有する場面が印象的であった。皆が客観的な視点から私の長所を指摘してくれたことで、自分では気づかなかった側面にも気づくことができた。4 人の意見が概ね一致していることから、特にそれらの長所に自信を持つことができるようになり、自身の長所や可能性について新たな自覚が生まれ、ありがたいと感じた。

実際、イギリスとの９時間の時差がある中で、研修後の課題や定期的なチームミーティングを大学院の学業や仕事と両立するのは容易ではなかった。時には仕事の繋忙期やテスト期間と被り、ストレスが溜まる時期もあった。それでも、チームメンバー同士の協力や励まし合い、そして彼らも同じような困難を抱えながらも頑張っているという意識が、乗り越える力になったと思う。お互いに助け合いながら、研修や課題、そして当日の発表や意見交換をスムーズに乗り越えることができたので、同じチームメンバーの存在は本当にありがたく、感謝の気持ちでいっぱいである。

最後に今後の展望についてだが、この交流事業で得た貴重な経験は、間違いなく私にとって大きな財産である。大学院や職場では出会えない参加者との交流は、貴重であり、彼らとの交流を継続していきたい。また、事前研修及び日中代表ユースフォーラムでレクチャーをしてくださった先生方は、普段では接点がない方々であり、彼らの知識や経験から多くを学ぶことができたため、彼らの著書などを読み、引き続き日中関係について理解を深めていくことが私の今後の目標である。中国語の学習は、一旦中断していたが、来年は再開して、向上に努めたい。今後もこの経験を活かし、日中交流を積極的に続けていく努力していきたいと思う。

国際交流の拡がりと外交の場でのふるまい

越智　歩

私は、今回の事業で国際交流の輪を広げることを目標としていた。私は、2022 年秋学期にフィンランド・ヘルシンキ大学へ交換留学を行った。そこでは主にヨーロッパ出身の学生と交流を行った。また広島県の事業「若者たちのピース・キャラバン」にて、イギリスとフランスを訪れ、現地の学生との交流を行った。これらの経験を通して、主にヨーロッパの学生と意見交換を行い、国際交流を行う経験を獲得してきた。その一方で、日本に近い国々の学生と交流する経験を獲得したかった。特に中国は日本の隣国であり、歴史的に日本と深い交流を行ってきた。加えて中国は文化や政治の面で国際社会での大きな影響力を持つ。それゆえ、特に中国の青年と交流を深めることは、私がさらに国際交流の輪を広げていくうえで素晴らしい経験になると感じた。実際にこの事業では、中国青年と交流を深めることができた。

私は教育班の一員として意見交流会に参加した。班員として、日本と中国の教育についての発表と意見交換を行った。例えば日本の環境教育の実践例として、京都府京都市のある小学校で行われている田植え体験を紹介したところ、中国青年からこの取り組みについて質問があった。その質疑応答を通して、日本の環境教育を中国青年に伝えられたと感じる。一方的に発表を行うのではなく、対話を行うことで、真に交流を深める国際交流を行うことができたと感じた。

また、外交の場でのふるまいを学ぶことができたのも本事業の大きな収穫であった。本事業では、事前研修から交流会本番まで、外交の場に参加する日本代表青年としての話し方や参加姿勢が求められた。例えば、第１回目の事前研修では、ファシリテーターから姿勢についてのアドバイスがあった。オンラインでの交流であるからこそ、姿勢が与える印象が大きくなる。だから良い姿勢を保つことは相手にとってより良い印象を与えるのだと学んだ。

続く事前研修では、テーマ別の班に別れて準備を進めた。そこでもテーマを決める話し合いにおいて、友好的な関係を築きながら準備を進める方法を学んだ。具体的には、ユーモアを用いて話しやすい雰囲気を持続させる重要性を学んだ。

意見交流会本番では、高原先生が外交の場で気を付けることとして、以下の７点を挙げた。「自分が絶対に正しいと思わないこと、相手の話すことをよく聞くこと、考え方の違いの根拠を理解すること、意見が違ったときに自分の意見を押し付けないこと、（自らが）多層的なアイデンティティを持っていると考えること、「友好関係を築きたい」という意思をアピールすること、報道ではなくて原文にアクセスすること」を挙げられた。この具体的なアドバイスを理解し、その後の意見交流の場で実践した。

特に「友好的な雰囲気を作ること」が最も身につけるべき外交の場でのふるまいだと感じた。余計な不和を排除することで、円滑に交流を行うことができると事前研修から事後研修を通して実感したことであった。例えば、ユーモアを用いつつ話し合いを始めることで、より早い段階から、両者にとって安心できる話し合いの場を構築することができる。そうすることで、より多くの人が緊張せずに意見交換を行うことができるのだと実感した。

この経験、気づきを今後の活動に存分に活かしたい。私の今後の長期目標は、例えば UNESCO といった国際機関で環境教育政策を策定し実践することだ。これを実現する上では、外交の場でのふるまいは必須である。背景の異なる人々と円滑に意見交換を行い、合意形成を行うことが必要である。この目標に向かうための短期目標を二つ上げる。一つ目はさらに国際交流の輪を広げていくことだ。例えば、私は海外大学院の修士課程への進学希望している。そこで、世界中の学生との国際交流を行う。二つ目は、政府や民間企業が行う海外交流事業に再度参加したい。これらの長期・短期目標において、本事業で学んだ、外交の場でのふるまいを実践したい。中国青年との国際交流の経験と、外交の場でのふるまいを活かして、今後の短期・長期目標に取り組みたい。

日中青年交流事業からの学び

加賀　駿希

○印象に残った具体的経験

中国青年の環境問題に対する深い知見とその具体的取組について強く印象に残った。

私は日本において環境保護ボランティアや、日々の生活の中で常に環境への意識を以て節電節水に取り組んできた。また、日本の環境問題への取組発表の為の事前学習において調べた内容もほとんど知っており、なおかつ少なからず取り組んでいるものだった。これらの事から私は環境問題に対して最先端の意識を持ち生活していると自負していた。しかし、中国青年との交流の中で彼らは環境団体の創設や実際に環境課題解決のためのビジネスを行っていることを知った。彼らは私が行っていたような個人で取り組めるような内容ではなく、自らが起点となり世間の環境問題への意識を高めるような事ばかりであった。

更に、自国内に留まらず日本を含んだ諸外国の事例に対しても非常に強い興味と探求心を抱いており、真剣に環境課題解決への取組を行っていることを知った。ここから今まで私が行ってきた環境問題への取組や自身が環境問題に対しての知識を持っていると思っていたことがただのうぬぼれに過ぎないと分かり、非常に恥ずかしく思った。

今回の交流を通して環境問題の改善をより前に進めていくためには、今まで私が取り組んでいたような個人的・独善的な取組では足らないことを知った。今後は、私自身にとどめた環境問題への取組のみならず、自身が起点となり、より多くの人が環境問題への意識が高まるような活動に取り組んで行きたい。

○本事業を通じて得た成果・学び

本事業の中で、私は中国青年に対し日本の取組を正確に伝え、また中国における取組の内容を、質問を通して深化させることで日中相互の取組の理解を一段深いものに出来た。この中で、私は日本での取組はより個人が自発的に行えるような取組に焦点を当て、長い目線をもって環境問題への取組を行っており、反対に中国では個人というよりはより国家・集団的に環境問題への問題意識を持ち、一丸となって取り組んでいるという日中両国の取組の特徴を学んだ。

日本の取組（個人で取り組める節電・節水等）には、個人的な取組が要請される分、行おうと思えばすぐにでも着手できる手軽さという利点がある一方で、個人での取組は課題解決へのインパクトがあまりない。また周囲からの、ある意味での監視の目がないため、そもそも環境問題に取り組もうと思い立つことが少ないという欠点がある事を学んだ。

また、中国では集団的に取り組んでいることから個人に期待する取組よりも大きなインパクトが期待できるが、一度行えば周囲からの期待から中途半端にやめることができず、より長期的な取組が期待できるという利点がある一方で、その強制力から実際にはそこまでの興味・意識が持てていない人たちにも行動を求めると環境問題への反発が生まれてしまうのではないかという懸念があることを学んだ。

上述の通り、両国の特徴にはそれぞれに利点と欠点がある。SDGs 目標やカーボンニュートラル達成の社会的要請が一層高まると予想される将来においては、両国の取組の欠点を、両国の利点を用いて改善させる、多国間融合型の取組を行う必要があると感じた。

○今後の事後活動について

今後の事後活動においては三点行いたい。

一点目は、自大学にて他国との交流の必要性とその興味深さを留学等支援室や説明会などに積極的に参加し、周囲に広めたい。本交流において得た学びは実際に他国青年と交流をしたからこそ得たものである。これは本やインターネットで学ぶだけでは感じられない現実感がそこにあるからだ。ここから直接交流を深める機会に飛び込む勇気を周囲に与えたい。

二点目は青少年国際交流事業事後活動推進大会において、本事業を通して学んだ経験や知識と、自身が過去にカナダと中国で過ごした経験を、明確にかつ詳細に一般の方もしくは希望者に広めたい。

本事業において中国の特徴を把握できたのは、過去の海外経験から日本のみではなく、二本の文化基準を持ったからこそである。ここから、三点目としては、一般の方にカナダで過ごした経験も併せて伝えることで複数の価値観を持つ利点を促し、一層深い文化交流の一助になりたいと考える。

私と中国の繋がり

加藤　紀香

本事業で特に印象に残った具体的な体験は、やはり日中代表青年間での交流と、その準備についてである。私は教育班に所属し、日本における教育の特徴やメリットについてグループのみんなで自分の受けてきた教育を振り返りながらまとめ、発表した。

今まで自分が長年当たり前に受けてきた教育について改めて考えることは、実際はとても難しいものであった。たとえデメリットやメリットが浮かんだとしても、それを中国青年に誤解なく伝えるために、単語や文章ひとつとっても、とても考えさせられる貴重な機会となったが、困難だったともいえる。

しかしながら、決して自分一人ではなく、班のみんなで何度も話し合いながら推敲を重ねることで、様々なアイデアを出すことができた。そのお蔭で、最終的には、日本教育を受けたことのない人にとっても、そして本番でも日本の経験教育の自然体験や、言語教育などについて漏れなく中国青年たちに伝えることができた。

さらに、中国青年たちからも「掃除教育がとても素晴らしい内容だ。」や、「日本の縦割りグループという在り方は、責任感を育む上でとても大切な役割を担っている。」などの絶賛を頂けることができ、異文化交流という機会がなければ決して知るよしのなかった自国の教育の素晴らしさを、改めて感じることができたこともとても良かった。

また、私の考える、異文化交流において大切なことの一つとして“温故知新”という諺が挙げられる。なぜならば、異文化交流をするとなれば、まず初めに思い浮かぶのが、交流したい異文化についてのみ知識を集め、勉強に励むことではないだろうか。

しかしながら、私が中国青年との交流準備の際に最も後悔したことは、自分が育ってきた国の歴史や文化、教育等については、意外にも理解や知識があやふやだったことである。

上記の経験から私は、異文化交流を行う際にまず私たちが行うべきことは、自国の文化等についても目を背けず、改めて腰を据えて向き合うことであると考えるに至った。

本事業やプログラムを通じて、日中間の友好関係を築くためには、一つの側面だけを切り取って一概に決めつけるのではなく、総合的に日中関係を俯瞰する必要があるのだと学ぶことができた。具体的には、国民感情や国内政治、経済利益、安全等であり、これらは相互密接不可分の関係にあるからこそ、上記四つの点につき結びつきを強めることが、今後の友好関係を大きく作用すると知ることができた。そこで、私たち日本青年にできる一番のことは、中国における知識を深め、相手国を尊重する姿勢を見せ、情報や認知を互いに共有し、それによって価値観や批判を共有できるようにすることであると分かった。

そして上記の目的を達成するための手段としては、私たちが自国の文化や歴史を勉強してきたように、相手国に対しても勉強を欠かさないことはもちろんのこと、本事業についてSNS等を通じて盛んに交流することが第一歩なのではないかと考えることができた。

わたしは現在国際弁護士を目指しており、将来は日本と中国間の経済的・法的支援を積極的に促すようにサポートすることで、最終的には日中の関係が良好になることを目標としている。

また、当該令和５年度日本・中国青年親善交流事業の活動が終了した後も、本事業で得た学びを形骸化させてしまうことのないよう、積極的に中国に関わる国際交流プログラムや活動などを行っていき、中国の方にとっての日本の顔となれるように精進していきたいと考えている。

日中代表ユースフォーラムを通して得られたもの

菊池　美希

私は日本・中国青年親善交流事業に参加したことで、新たな視野が広がり、貴重な経験を得ることができた。

この事業の特色は、中国青年と交流できることだけではなく、様々なバックグラウンドを持つ日本青年参加者と関わりを持つことができる点だと考える。普段大学で過ごしている中では出会えないような方々と「中国」という共通の関心を持ちながらつながりを深めることができたということがとても貴重に感じた。また、参加者それぞれのバックグラウンドや専門分野が異なるため、一つのテーマに対しても複数の視点から物事を考えることができ、より深い議論を行うことができた。これにより、当日の中国青年に向けての発表も充実したものにすることができた。加えて、自身の視野を新たに広げることにもつながった。

本事業で特に印象に残ったことは、中国の青年たちが想像していた以上に日本について興味を持っていたという点だ。私は気候変動班に所属しており、当日の発表はメンバーが大学生、大学講師であったことから、自分たちの大学で実際に行われている取り組みを中心に発表した。意見交換の際には取り組みに対して更に詳しく知りたいという意見や質問をいただいた。交流会終了後もWeChatを用いて、意見交換で話足りなかった点を互いに語り合うなどした。印象に残った点として、中国青年たちが想像以上に日本について興味を持っていたということを挙げたが、日本青年も交流会に向け入念に事前準備を行った。その熱意が中国青年へ伝わっていれば良いと思う。

この交流会の成果はオンライン上ではあるが、直接言葉を交わし、両国がそれぞれ互いに興味を持ち合うことで、深いコミュニケーションにつなげることができたという点だと感じる。この直接言葉を交わす、互いに興味を持ち合うということが相互理解を深めることにつながるヒントなのではないかと考えた。

事業を通して私はコミュニケーション能力やグループワークスキルの面で大きく成長できたと感じる。事業に参加をする中で、私はグループメンバーの良い部分を吸収することを特に意識した。グループの中にはリーダーシップを発揮する人、アイデアマン、アドリブに強い人等がおり、持っている強みはメンバーそれぞれ異なっている。私は事前研修で行ったコミュニティビルディングを通して、自身がアドリブで自分の意見を伝えることに苦手意識を持っていることに気が付いた。このような苦手意識を克服するにはどうすれば良いのか、自分が更に成長するために必要なことは何かを考え、メンバーの良いところを少しずつ参考にしていった。このような個人的な取り組みを通して、現在の私は事業に参加する前の私と比べて大きく成長できたと感じる。

その一方で、グループの方から聞き上手な点と自分の意見をしっかり持っているという内容のフィードバックをいただき、今まで知らなかった自分の良い点や特徴にも気が付くことができた。普段生活をしている中で自分についてフィードバックをもらえる機会は少ないため、新たな自分の一面に気が付く貴重な機会となった。

本事業に参加をしたことで、視野や経験を得ただけでなく、共通の目的や興味を持つ仲間に出会うことができた。実際に交流イベントを企画していたり組織を立ち上げていたりしている参加者もいるため、良い刺激となった。また、そのような方々とつながりを深められたことで、国際交流イベント等への参加の敷居が低くなったと感じる。今後、今まで以上に日中交流イベント等に参加し中国に対する理解や知見を深めていきたい。また、参加するだけではなく、今回事業を通して得ることができたヒントを用いて、私が所属する千葉県日中友好協会や大学等で自身が企画を立てたいと考える。一歩踏み出しこの事業に参加をしたことで、国際的な視点や中国に対する理解を深めることができた。今度は私自身が青年の国際的な視点を持つきっかけを提供する側になりたい。

学びと経験、そして共有

栗原　加奈

このレポートでは私が令和５年度日本・中国青年親善交流事業の参加を通して、特に印象に残ったこと、学び、成果、そして今後の活動目標について述べる。

はじめに、特に印象に残ったことと学びに関しては、意見交換会に向けて事前研修を通して徹底された「準備」である。一般的に本番に良い成果を挙げるためには「準備」が非常に重要であることは、多くの教育プログラム、企業、学校等で言われていることだが、このプログラムを通してより身近に「準備」の重要性を感じることができた。特に今回のプログラムは日中両国の公式外交プログラムであり、公式の場での態度、姿勢、積極性などが特に重要となるため、それらに順応したワークやグループプロジェクトを経験することが出来た。また、様々な社会問題についてグループプロジェクトの形式で意見交換会までに準備を進めていくことで、特に日本青年同士の交流、そして絆は強くなり、最終的に非常に信頼できる交友関係まで築くことができるようになったことに、とても喜びを感じている。これらの経験を通じて、予め本番に向けて計画的に十分に余裕を持って「準備」をすることによって、本番に十分に力を発揮できるだけでなく、グループでのコミュニティービルディングをしっかりと確立することができた。これらの学びと経験は今後自分が参加することとなる様々なグループプロジェクトや企画で活かしていきたい。

次に、この事業を通して得た成果について触れたい。学びの内容とは反対に、特に中国青年との意見交換会当日には、私の元々の強みでもある、臨機応変さ・コミュニケーション力を活かして、限られた時間に対応することができた。その結果中国青年とも限られた時間の中で最大限に交流することができたと感じた。

また課題別グループの話合いでは、主にタイムキーパーと質疑の応答を率先して取り組んだ。

そして同じ日本青年のグループメンバーとも当日グループチャットを通じて率先してコミュニケーションをとる事によって、円滑に交流を進めていくことができた。私は海外に在住しているため、時差の関係で交流会前の課題別グループミーティングへの参加率が不安定だったが、メンバーが情報共有をこまめにしてくれた事によって、混乱する事なくグループメンバーと共に、準備を進めていくことができた。結果、上記で述べたように日本青年のグループメンバーとは非常に強い信頼関係を築くことができた。同じグループのメンバーのサポートがなければ、私はここまで円滑にこのプログラムに参加できなかった。彼らには非常に感謝の気持ちで一杯である。このように、チームメンバーとチームワークよく活動できたことはこのプログラムでの一番の成果である。

最後に、今後このプログラムで得た学びや経験を将来自分で起業する時に活かしていきたいと思う。先述の通り、計画的な準備は何をする際にも非常に重要なことであり、このことをいかに若いうちから学ぶことができるかが鍵となるように思う。私は将来、日本人の学生をターゲットに、海外留学にあたっての奨学金プログラムや今回のプロジェクトのような未来のグローバルリーダー育成プログラムを提供する留学斡旋企業を起業することが夢である。起業を希望する理由としては、現在も含めこれまで複数回に渡る海外留学の際に、私は必ず奨学金プログラムに挑戦した。これは奨学金をもらうことをいちばんの目的にしているのではなく、奨学金プログラムや今回の様な外交プログラムに参加する事によって、参加前、参加中、参加後のそれぞれの期間で新しい学びや出会いを経験することが出来るからである。これらの自らの経験を活かして将来特に日本の若い世代の人々がより広い視野を培うために、ぜひ世界へと挑戦してもらいたい。そしてそのお手伝いをしたいと強く思う。今回の日本・中国青年親善交流事業は、まさにその象徴である。自らが青年代表として参加したことを強みとして、今後次世代のグローバルリーダーの育成に貢献したい。

日中関係発展の兆しを求めて

笹木　愛

私は中国と将来の医療を担うパートナーとして、両国の医療を向上させる活動を進めたいと考え、この事業に参加した。

この事業で印象的だったこととして、交流会が挙げられる。交流会では、中国青年と「少子高齢化」について対話したことが印象的であった。

その理由として、日本で習得できる中国の少子化・高齢化事情の情報は限られており、真に習得したい情報は皆無であった。しかし、中国青年との対話による交流会で、その情報を垣間見ることができた。

その情報で興味深かった内容は二つあり、一つ目は中国でも同じく認知症患者が増加している対策として、認知症患者には位置情報追跡ブレスレットが付けられていることである。日本には実情存在しないシステムであったことから、どのように機能しているのか、また個人情報はどのように保護されているのか疑問を持ったが、位置情報追跡ブレスレットを認知症患者はつけていることを知ることができた。

認知症患者に位置情報追跡ブレスレットが付けられていることで、一人で出歩いてしまっても、警察や近所の人が認知症患者だと特定することが容易になり、事故を未然に防ぐことが出来るのではないかと考えた。このような位置情報追跡を可能とする画期的なアイテムが、日本でも普及すれば、認知症患者が巻き込まれる事故は減少するのではないかと考えた。

また、日本の取り組みとして、認知症サポーターが認知症患者をサポートし認知症患者との共生社会を目指していることについて、中国青年に紹介したところ関心を持っていた。そのことから中国青年も、認知症患者とどのように共生社会を目指していくのか、課題としているのではないかと捉えた。

二つ目は、「9073」という数字で高齢者の生活を表していることも興味深かった。

「90」の意味としては、100 人のうち 90 人が家庭で老後を楽しむことを指し、「73」は残りの 10 人のうち、7 人が介護スタッフを雇い、3 人は高齢者用の施設に入ることを指す。日本ではこのように高齢者の生活状況を四つの数字を用いて表現することはないため、とても新鮮な表現であった。

中国と日本の高齢者の生活状況を容易に比較することは難しいが、ほとんど両国の生活状況は同じではないかと推察する。しかし、日本では介護保険が拡充されていることから、中国の高齢者より日本の高齢者は、介護施設・介護用具などに手が届きやすく、介護サービスは十分なのではないかとも考えられるため、生活環境は安易に比較できない。それゆえ、どのように中国の高齢者は暮らしているのか、また中国の介護保険の現状などをもっと詳しく知りたいと思った。

今回、オンラインでの交流会であったため、交流会以降も関係を築きたいと思い、中国青年と WeChat を交換した。しかし、中国青年に質問しても社会人で忙しいということもあり、なかなか返事がもらえないのは欠点であったため、実際に中国に訪問し対面で話すことの重要性を改めて感じた。

事業参加後は、自身の職場でも中国支部があるため中国の治験に従事しつつ、医療の情報交換をして両国の医療の貢献をしたいと考えている。

また職場以外の活動では、今後認知症サポーターとして、日本で認知症患者への支援や共生社会の実現に貢献し、中国にその活動を報告したいと考えている。

またその活動を通し、日本と中国の国民同士が医療や健康について自発的に考える機会を作る活動を創りたいとも考えている。

その理由として、日本と同じく中国は 2019 年の World Population Prospects で高齢化率 9.3％と高い値を示され、高齢化社会になることが示唆されている。それゆえ、日本と同じく高齢者が罹る疾患もおのずと増えることが予想されている。この現状から、両国の国民一人一人が、お互いの健康を気にかけ、健康を意識することから日中関係の発展は築き上げられるのではないかと考える。

また内閣府の中国青年との交流会だけでなく、実際に中国を訪問し、中国人の日常生活から何か貢献できることはないかを模索し、日中関係の発展に尽力したいと考えている。

伝える力

佐渡　愛美

本事業の中で最も印象に残った体験はやはり「日中代表ユースフォーラム」午前の部で行われた青年発表である。私は幸運にも発表担当者の１人に選出して頂き、正式外交の場において独壇で話すという大変貴重な体験をすることができた。

青年発表では「新時代に求められる日中青年の使命」をテーマに、相手国に対する“知的好奇心”と“探求”の重要性、そして“日中交流の輪をすべての世代に広げる”という目標について伝えた。

この経験を通して私は、「伝える力」を学ぶことができた。青年発表準備にあたって内容の見直しが繰り返し行われたが、その中でご助言頂いたのは、自分という存在を見失わないようにする、ということだった。「新時代に求められる日中青年の使命」というテーマであれば、その内容はいくらでも壮大にすることができる。しかしながら、自分は何を経験したのか、何を感じているのかという部分が欠落してしまっては、相手に熱意までを伝えることは叶わない。この部分に気がつくことができたのは大きな成長であり、発表にも活かすことができたと感じている。実際に発表後多くの方からお褒めの言葉を頂き、達成感にもつなげることができた。

ここまで青年発表について触れてきたが、「伝える力」は一つの出来事の学びに限ったことではない。午後の部の交流会でも「伝える力」は大きな学びとなった。

交流会の準備段階から本番に至るまで私は司会を担当し、人一倍声を発する機会が多かった。特に交流会本番では、通訳の方を間に挟むものの、様々なことを中国青年の方々に伝えなければならない。限られた時間の中で時間は最小限に抑えながら、最大限の情報を伝えるには、資料作成から言葉選びに至るまで適切な取捨選択をせねばならず、大いに「伝える力」を鍛える機会となった。質疑応答が白熱し、全てのプログラムを予定通りに進められなかったのは反省点であるが、中国青年の方々に我々からの発信を興味深く受け止めて頂けたという点は満足している。

上記のように本事業では「伝える力」を学び、青年発表や活発な交流会に成果として還元できたわけであるが、この学びは日中交流において不可欠であると感じている。午前の部の基調講演の中では、国家間には情報のギャップがあるということを知った。もちろんそれはアクセスできる情報媒体が異なる日中間でも例外でなく、自身が常に正しいと思わず、相手との違いに誠実に向き合うことが求められる。ゆえに、相手の持つ情報を否定するような伝え方でなく、互いの違いを理解しながら、情報を加えるような形で、相手が不快にならない伝え方を模索していくことが国際交流においては重要であり、今後の良好な日中関係の構築に必ずつながるはずだと考える。

「伝える力」は事後活動においても積極的に活用していきたい。私は事後活動を通じて本事業の存在を周囲に広め、日中交流の入り口に立つ人を増やしたいと考えている。そのためにまずは大学内での広報活動から始めようと、現在大学内で企画を考案しているのだが、その際、より多くの学友の心に刺さるような発信を心がけていきたい。物事を客観的に捉えることは重要であり、日中関係を観察する際にもそうすべきだが、活動報告に近い広報活動の場合は、青年発表で学んだように、自分の存在を忘れず、一参加者として、あえて主観的に伝えることも必要であり、それによって熱意や臨場感を伝えられるだろう。また、交流会での経験のように、情報の取捨選択をすることで、限られた期間や場所の中で最大限の情報を簡潔に伝えることができると思う。「伝える力」は一見単純そうに見えるが、その背景には様々な要素が存在し、交流において必要不可欠な能力である。今回の学びをとりわけ日中交流サポートにおいて日常的に活かし、ゆくゆくは同世代の日中交流サポートに尽力する存在となりたい。

最後に本事業に際して関わってくださった全ての方に感謝申し上げる。本事業での様々な学びや経験、出会いを今後の人生の糧とし、日々邁進していこうと思う。

国際交流で得られるもの

柴田　唯矢

「（中国は）広い国だからこそ、どの地域のどの年代の人について話しているかで、内容が大きく変わる」事前研修で伺った講師の斎藤淳子さんの話は、中国という国について考える上で強く印象に残った。

日々の生活の中で、中国について知る機会は多い。テレビニュースやウェブサイトなどを通じて、私たちは政治や経済、また社会の様子について多くの情報を得ている。しかし中国という広大な地域を、そういった情報だけで完全に理解することは難しい。

今回の交流会を通じて、中国に住む同年代の若者と時間をかけてコミュニケーションをとることができた。こうした経験を通じて、これまで自分が知らなかった中国の一つの側面を、新たに知ることができたと感じている。

特に私が所属していた班では「少子高齢化」を主要なテーマとして、中国青年と話し合った。中国では少子高齢化が実際に進んでおり、社会問題の一つとして認識されている。特に結婚数の減少や、出産費用の高騰は重要なテーマであり、社会的関心も高いようだった。また実際に出産や育児を経験している方もいらして、様々な苦労など貴重なお話を伺うことができた。データなど数字だけでは理解しにくい部分について、個人的な話も交えながら知ることができた。

また先進国の中でも少子高齢化が先行している日本の状況について、中国青年が強い関心を抱いていることが分かった。日本青年はプレゼンを用意し、少子高齢化に関する現状、また認知症などに対する介護制度について発表した。一方で中国青年のプレゼンでも、日本の現状について詳しい分析を聞くことができた。結婚数の減少や人口動態の変化が中国と比較して二十年先行しているなど、興味深い分析を伺うことができた。

こうした経験は新しい側面から中国という国を知る機会となった。若い世代だからこそ、将来に確実に影響を与える少子高齢化は重要なテーマだ。自身の中国に関する知識に、「青年の視点」という新しい視座を加えることができるようになったと感じている。

また発表にあたってのプレゼン作成でも学びがあった。少子高齢化については元より関心があったため、多少の知識はあると自負していた。しかし相手に発表するということになると、各種詳細なデータを集め、直近の動向を調査する必要があった。そうした中で、自分がこれまで知らなかったことも多くあることが分かった。また同じ班のメンバーの発言から新しい知識を得ることもでき、有意義な時間となった。特に「認知症サポーター」という日本独自の制度は、高齢化が進む社会において、問題解決の一助になる重要な取り組みであると感じた。他者に発表するという行為を通じて、日本の現状についてより詳しくなることができたと考える。

今回の交流では、中国に住む青年の声を聞き、共通の課題である少子高齢化についてより理解を深めることができた。こうした成果は国際交流という貴重な体験をしたからこそ、生まれたものだと思う。

国際交流には言語や文化の壁などで様々な困難がある。特に私は交流会の本番では司会進行を担当したため、コミュニケーションや時間配分などでハプニングなどもあった。しかし全体を通じてみれば、極めて良い経験ができたと感じている。

今後はこうした経験を共有し、少子高齢化について考えるきっかけを作りたいと考える。また、同様の交流会などに参加することで、自身の視野をより広げてみたい。少子高齢化にとどまらず、様々なジャンルに取り組んでいきたいと考えている。今回の経験をここで終わりにするのではなく、通過点として、今後も積極的に国際活動などに取り組んでいきたい。

事業を通して学んだこと

釋　のゝ

この国際交流は私の人生の中で大きな影響を与えた。私は本事業での目標として、オープンマインドで相手の意見を聞き入れ新しい知識を入れることや、両国の良好関係をよくするにはどうしたらいいのかを考え、事業後にその案を実践していきたいことを挙げていた。結論から言うと、今まで私は中国の表面上のことしか知らなかったが、この事業を通して中国青年や日本青年たちと交流ができ、新たな知識が増えた。

また、本事業で学べた事はたくさんある。まず事前学習での読書課題で読んだ斎藤淳子先生の「シン・中国人　―激変する社会と悩める若者たち」だ。Zoomでも実際に講義をして頂き、この本では中国の若者の目線から親世代まで様々な視点から中国の問題を見ることができた。私には中国の若者世代の恋愛の悩みにはあまり馴染みがなく、その文化の違いに驚いた。また、大学進路や整形のトピックにも触れていて楽しく中国のリアルな現状が理解できたと思う。

この事業で私は教育チームに所属していて、オンライン交流会では中国青年と交流し、中国の教育面を知ることができた。また、中国人青年の経験や自身で取り組んだプロジェクトなどを聞き、彼らの行動力や計画性に驚かされた。例えば、中国の田舎では親が出稼ぎに街に行く。しかし子供たちはどうかと言うと、親の愛情不足で勉強のモチベーションがないと聞いた。その現状をどうにかしようと中国の参加青年の一人が自分でプロジェクトを実行した。そのプロジェクトは音楽を使って、子供たちの精神的な成長と脳の成長に役立つことを目標にした。まず、学校のために音楽の環境やカリキュラムを整えたり、音楽の先生の研修も行ったりした。コンサートなどの開催への支援も行った。さらに、子供たちに自分を見せる機会を与え、彼らに自信を与えたことも印象に残った。日本では両親が出稼ぎに行く文化はなく、その話は新鮮だった。そのプロジェクトの発想や主体性に圧倒され、中国青年の行動は私をとてもやる気にさせてくれた。また、両国の教育面での共通点も見つけることができた。

他にも、教育チームのみんなと協力ができ、お互いを高め合うことができた。チームのおかげで自分自身では見つけられない自分の強みを知れた。例えば、みんなが出した意見に対して、鋭い意見を言い批判的思考力があることだ。私はこの事業を通して、今後も国際交流に貢献していきたいと思った。日本青年と交流してみんなとても優れた方達でいつも刺激をもらっていた。その中で、私は日中学生交流団体 freebird の存在を知れた。実際に役員に入部することができたが、事業に参加するまで今あるすべての景色は想像していなかった。その団体で私は SNS 管理部に所属する事になり、今はまだ魅力的な文章を考えるのに苦戦しているが、もっと中国の魅力を伝えられるような文章やストーリーの作り方を学んで投稿していきたい。もちろん個人のインスタグラムでも私の周りの同世代の方々に日中の魅力や国際交流について考えてもらえるような発信をしていきたい。

それ以外にも HSK ６級レベルに上達するように中国語の学習を続けて、中国人と交流し中国人の友達をもっと増やしたい。

改めてこのような国際交流に参加できてとても光栄に思う。私は前々から両国の良好関係のことで何かできることはないかと考えていた。その答えが全て見つかったとは言えないが、本事業に参加できたこと、参加青年やスタッフたちと繋がることができたこと、そして日中学生交流団体のことを知り入部できたこと全てが望外の結果になった。このようなご縁に感謝して、より多くの方々に国際交流の楽しさを発信していきたい。

日中の未来に貢献できる人間に

中田　一平

今回、日中代表ユースフォーラムに日本代表青年として参加したことは私にとって非常に意義深い経験となった。交流当日のディスカッションはもちろんのこと、事前・事後研修においても、自分が「日中青年の代表」として活動することはどういう意味を持つのか、様々な視点から教えて頂き、青年代表としての自覚が芽生えたこと、そして本事業を通して「日中の未来に貢献する人材になりたい」と心から思えるようになったことが私にとっての収穫であった。

本事業への参加のきっかけは、現在の目標でもある中国での大学院進学に向けて、多角的に中国との接点を増やしたいという想いがあったことである。私は日本で大学卒業後、大阪の社会福祉に関するベンチャー企業に就職し５年間勤務した。その中で少子高齢化や社会保障にかかわるような共通の社会課題を抱える中国の今後の動向に関心を持ったことがきっかけで中国という国に関わり始めた。幼いころより海外志向はあったが、「中国」を意識した経験はなかった。今後の自分のためにも、何か中国と関わる事業はないかと調べていたところ、本事業の存在をインターネットで知り、申し込みに至った。そのため、恥ずかしながら日本・中国青年親善交流事業の意義や参加する青年にどのような自覚が求められているのか、という部分については今思えば理解が非常に浅かったと感じている。

本事業は事前研修、青年交流当日、事後研修の大きく三つのパートに分かれている。それぞれに意義やねらいが明確にあり、短期間で青年代表として活動することの意義や自覚を得ることができるようにプログラムされていることが非常に印象的だった。事前研修においては斎藤淳子先生の現在の中国をどのように捉えるべきか、というレクチャーが最も印象的だった。研修を受講した際はすでに上海にて語学研修中であったが、そこで自分が出会った若者や感じたことを照らし合わせることで、中国という国への解像度が高まった。特に、中国の急激な発展による世代間の価値観の乖離や、それらが現代中国の若者たちの行動様式にどのような影響を与えているか、そしてそういった背景を理解した上で中国青年と向き合う必要があるという点が今回の交流事業のみならず、中国と何かしら関わっていこうと考えている私にとっては極めて印象深いメッセージであった。

交流事業本番では、私は「少子高齢化」について両国それぞれの課題や現状についてディスカッションするという内容を担当した。そこでは中国の老人介護や少子化対策と言う文脈でどのような取り組みが現場で行われているか、と言う話が非常に印象的であった。また、知識としては知っていたが中国の高齢者福祉の対策としての 9073 モデルについての実際の現場からの意見を聞けたことは本当に貴重だと感じた。さらに、中国の青年たちにとっても「少子高齢化」という問題が非常に重要であり、関心度が高いということを肌で感じられた点も私にとっては大きな学びであったと思う。

事後研修においては、交流事業で得た学びをそのままにせずに自分自身のキャリアや価値観、青年代表としてチームで活動する中での気付きや学びを自覚できるようなプログラムがあり、全体を通して非常に本事業が丁寧に組み立てられていることを感じたと共に、運営に携わってくださっている方への感謝を改めて感じた。

今回の事業で中国への理解が深まったことはもちろんであるが、日本を代表する青年として、自分の発言や立ち振る舞いを意識する必要があるということを知った。相手の価値観を理解すること、その上で自分たちの大切にしていることを丁寧に伝えていくこと、その積み重ねの中で本事業が今日に至るまで続いてきたことを知った。外交の現場で活躍されている方々には遠く及ばないが、相手国からすれば、自分が「日本（という国の価値観やを）を代表している」という視点と責任を感じたことは、極めて貴重な経験であった。今回の経験を通して、今は日本と中国をつなぐという言葉が特に心に残っている。まだまだ未熟な身であるが、日中の未来に貢献できる人間になれるよう、引き続き努力していきたい。

日中の未来、自分の存在意義

原野　海華

本事業に参加し、日本代表青年として中国青年と意見を交わすことは非常に意義深い貴重な経験になったと思う。

事前研修では、「シン・中国人　―激変する社会と悩める若者たち」の読書学習、および作者である斎藤淳子先生による講義が行われた。中国社会の現状、年代別による価値観の相違、言語化では難しい中国社会の事について説明頂いた。事前知識が交流会当日の理解をさらに深める事につながると感じた。

交流会では、中国青年は日中人口減少の特徴、少子化の原因を説明し、日本青年の発表とはまた別の角度で日中の比較をしながら中国の少子高齢化の現状について紹介した。中でも中国青年の実体験の共有、少子化改善策、老後施設の利用率についてとても興味深い話が聞けた。実体験の共有については、子持ちの親である中国青年が実際に中国においての出産費用、保険について話し、また、出産後の職場復帰の問題についても言及した。日本でも出産後の職場復帰、女性のワークライフバランスの問題が存在するので、中国も同様な現状にあることを知った。中国政府による支援については、若者に出会いの場を提供したり、子育てに必要な教育費の資金提供をしたりしていくことで経済的負担が減り、結果的に少子化の改善に繋がると話した。

老後の施設の利用度については、日本と違い高齢者の 90％が家庭で老後生活を楽しむという驚きの結果が分かった。一方、独居老人や障害のある老人への支援が問題となっている。

また、交流会当日の呼びかけ、次はどんな質問をするのかを LINE でコンタクトを取っていたが、時間調整が難しく、音が途切れる事もあるオンラインだからこそ裏での話し合いは欠かせないことだったと思う。

交流会を通し、日中の少子高齢化での相違点、中国の現状、パワーポイント作成を通して日本の少子高齢化現状など、更に理解を深める事が出来た。同時に少子高齢化は日本、中国、双方の国にとってとても重要視されている社会問題なので、これからは国際協力を進めていくことの必要性を強く感じた。「積極的に行動する」を事業目標としたため、事業内では「自ら今までできなかったことに挑戦する」を意識しながらの行動をした。日本青年代表としての発表、Zoom 背景の作成、グループの副リーダー、どれも勇気のある挑戦だったと思う。特に Zoom 背景のデザインは初めてのデジタルデザインだった。中国を表す万里の長城、日本を表す桜の木に、背景には龍を入れた。龍には龍門登りのように互いの気持ちの「門」を登り、日中関係もさらに良くなるようにという気持ちと、来年が辰年ということもあり、背景に龍を入れた。交流会の為の一日限定のデザインだったが、事業後皆様からの嬉しいお言葉や反応を頂き、写真でみた時の統一感も出せたので時間を掛けてよかったと改めて思う。

グループの最年少という所もあり、明るいと評価され、副リーダーとして雰囲気の調整を大事にしていた。全体的に色々と分野が違う挑戦が出来たが、グループ内での自主的な提案がまだ足りないと考えている。

元々異文化交流に興味があり、日中ハーフということもあり、小さいころからアイデンティティが分からなく、国籍、言語、日本人だけれど「中国人」という自分自身のあり方に悩まされてきた。だが日中交流イベントに参加していくうちに二つの国の背景を持つことを強みに思えてきた。交流を通して中国人、中国の良さを知っているから他の同年代の人々にも知ってほしい。これが私が日中交流を続ける原点でもある。単純な理由だが、今までお世話になっている中国人への「恩返し」でもあると思っている。

今後は引き続き日中交流に対する情熱を持ち、同年代にむけての情報発信をしていくことを考えている。実際、来年に向けてある団体の広報とし、活動を開始している。今後はインスタ、Facebook の運営、パンフレット、ポスター作製を予定している。また、現在通っている中国人民大学では積極的に中国文化、歴史を学ぶ姿勢を持ち、異文化の魅力について理解を深めたいと思う。

今できる事に全力でぶつかっていく。

日中の未来の為、自分の存在意義を問い続ける為に。

日中親善交流事業を終えて

本田　舞

私が今回の事業に参加して特に印象に残った体験は、中国青年との意見交流会でのことだ。意見交流会に入る前に、お互いの共通点を探すというアイスブレイクを予定していたのだが、中国青年の方々は私たち日本側青年よりも年齢層が高かったため、アイスブレイクをどのくらい楽しんでもらえるか、不安な気持ちがあった。また日本と中国で国籍も異なるメンバー10人全員に共通することなどあるだろうかという不安も感じていた。しかし、いざ会が始まってしまえば、想像よりもずっと楽しくアイスブレイクを行うことができた。中国青年の方々からも積極的な発言を得ることができ、そもそもの目標であったお互いの緊張をほぐすという目標も達成することができた。この成功は、事前準備を慎重に行った結果得られたことだと私は考えている。司会原稿を書くだけではなく、様々な状況を想定して準備を行うことができた。例えば共通点がなかなか見つからなかった時には、「お互いの文化に興味を持っている人」などの全員が当てはまるであろうお題を出そうと話し合った。また発言の順番やリアクションを積極的にとることも事前に確認しあった。これによって、私自身も心の余裕をもってアイスブレイクに参加することができ、その後の意見交流会も円滑に行うことができた。意見交流会の一番初めのパートであったアイスブレイクは、私にとって非常に印象深いものである。

上記したアイスブレイク後には中国青年と日本青年同士で文化についての意見交換会を円滑に行うことができた。私が、この意見交流会をはじめとするプログラム全体から学んだことは､「助けあう」ということだ。私は今回の事業で、始めてリーダーという役割を経験させてもらった。自分のリーダーシップに自信が持てず、これまでリーダーという役割に挑戦することができずにいたが、この事業を通して絶対に成長したいという強い思いがあった。最初は、リーダーとして指導性を発揮しなくてはならないと考えすぎてしまい、振り返ると独りよがりな気持ちでいたと思う。しかし、他の小グループのリーダーの方々とお話しする中で、自分の中のリーダー像を変化させることができた。このように、尊敬できるほかの青年の方々の姿を見ることができたのも大きな学びである。

自分なりのリーダーの役割として、私は二つの取り組みを行った。

一つ目は、チーム内に仕事を割り振ることだ。私を除く４人のメンバーに、書記、会議の進行、副リーダーの役割を担ってもらった。このようにしてメンバーに頼ることが、事前準備の成功につながったと考えている。

二つ目は、会議のポジティブな空気を作るということだ。私自身、グループ会議の際に発言に臆する気持ちがあるため、メンバーが安心して発言できる環境を作りたいと考えた。このためにリアクションを積極的にとるなどして会話のキャッチボールの受け手になれるように意識した。

他のメンバーの方の協力もあって、最後には無事意見交換会を意義あるものにすることができ、また私自身学びを多く得ることができ、人生の糧にすることができたと考えている。実際、事後研修でのチーム内フィードバックの機会には、メンバーから「意見を言いやすい雰囲気にしてくれた。」などの評価もいただくことができた。

今回事業に参加させていただいたことで得た学びは、二つの側面から活かしていきたいと思う。

一つが中国との交流を続けていくということだ。今回の意見交流会では、中国青年の方々から、アニメや遺産、服の面から文化について紹介していただき、中国文化への理解を深めることができた。この活動を通して中国への関心を高めることができたため、今回の事業への参加をばねにして、今後さらに中国の方々と交流していきたいと考える。

二つ目が、更に人として成長していきたいということだ。今回の授業を通して、リーダーという役割への自信を獲得することができた。しかし、まだまだ未熟であるため、今後も臆せずに様々な場面での挑戦を続けていくことで、社会に貢献できるような人間に成長したいと思う。まずはこの後予定されている事後活動に向けて、精一杯取り組んでいきたい。

「人」と「人」との交流

松原　風花

私は、自分の経験に依らない噂などの情報から偏った「中国観」を抱いていた。それを見直したいと思い、今回本事業に応募した。

本事業で学んだことは、中国に関する知識だけでなく、集団活動をするうえで自分に足りない点や国際交流のマナーなどにまで至った。その中でも事業内で大きく印象に残っていることは二つある。一つは同じ文化班内の日本青年との事前準備の際、もう一つは、中国青年との交流会当日の際に学んだことである。

まず、事前準備の際の同じ班の参加青年の立ち回りは、とても勉強になったと感じている。与えられた役割を全うするだけでなく、それぞれの個性を生かしたチームづくりが行われていたのである。リーダーのまいさんは、みんなをまとめるだけでなく、柔らかい姿勢で意見を受け取ってできるだけ全員の意見が通るようにしていた。副リーダーのレイチェルさんは、リーダーの補佐をするだけでなく、会話がスムーズに進むような声かけをして話し合いが上手くいくようにしていた。会議進行のまなほさんは、上手く議題をまとめて効率の良い話し合いを実現させるだけでなく、新たなアイディアの創出で上手く落としどころをつけていた。同じ書記であったもねさんは、わかりやすい議事録をつくるだけでなく、話し合いの場を明るくしていた。そのような環境の中で活動することで、自分にはチーム全体を見る目が足りていなかったということを改めて認識し、反省する機会となった。単に与えられた役割をこなすだけでなく、自分の能力やキャラクターを集団の中でどのように上手く作用させることができるのか、ということを考えて立ち回ることが必要であると学んだ。これは、同じ目的を持った優秀な方たちと活動できたからこそ強く感じることができたのだと思う。

そして、中国青年との交流会は、私の既存の「中国観」を完全に覆すものであった。事前研修の時点で、自分には中国やそこに住む人々に対する思い込みが多く存在していたことに気づかされていた。しかし、「直接」彼らと交流することで、より確信をもってそれに気づくこととなった。具体的に感じたことを挙げていく。まず、中国青年の方の日本に対する興味の強さが感じられた。それも、決してネガティブなものではなく、好意的なものであった。日本青年の発表に対する質問や日本語の学習レベルからそれがうかがわれ、とても嬉しく思った。そして、中国青年の人柄のよさも感じた。「国民性」といったステレオタイプに縛られてしまっていた私にとって、この気づきは良いものであったと思う。中国青年の方たちは、アイスブレイクに笑顔で参加してくださったり、発表時間の超過に対して柔らかい態度で対応してくださったりしたのであった。私は、これらを「気づき」だとしてしまうほど以前はよくないイメージを抱いていたのであり、今では自分の思い込みは失礼であったと恥じている。

本事業から学んだことはたくさんあったが、私が今回最も大切だと思った学びは、「人」と「人」との交流の重要性である。「人」と「人」との交流とは、「国」や「集団」といった大きな単位ではなく、「人」、すなわち「個人」という小さな単位でのかかわりのことである。大きな単位で物事を見ると、見えない部分が多くなってしまい、誤解が生まれ、理解や友好から遠ざかってしまう。今回の事業では、小さな単位で中国や中国人を見ることができ、良い経験になったと思う。

今後、この学びを無駄にしないように、今回のような交流事業やボランティア活動に参加していきたいと思う。また、海外留学に興味があるので、そちらも挑戦したい。「人」と「人」との交流を大切に、今回の事業での異文化交流・国際交流や集団活動の経験を生かし、活動していけたらいいと思う。

気づきときっかけで、みんなを変える

松本　彩花

「あなたが中国に興味を持つようになったきっかけは？」これは、私が本事業に参加する中で、他の参加青年や運営の方々に多く訊かれた質問である。同時に、私が彼らに最も訊いてみたかったことでもある。

まずは、私の回答を紹介する。私が中国に興味を持つようになったのは、大学２年次、2019 年９月からの四か月間の北京留学である。それ以前の私は、中国語専攻であったにもかかわらず、ただ語学の習得を目的とし、中国に対してはほとんど興味がなかった。ところが、北京留学を通して、中国の発展を目の当たりにした。また、大学の日本人留学生会主催の日中交流会で中国人の友達ができ、中国人の情の熱さに感銘を受けた。それから中国が好きになり、自分と同じような経験を多くの日本と中国の学生にさせたいと思った。そして現在、山東省済南市の大学で日本語教師として勤務するまでに至っている。

このように、実際に中国に行ってその魅力に気づき、中国に興味を持つようになったという人は多い。その一方で、「それ以外のきっかけ」があるとしたら、それはどのようなものなのだろうか。そして、その「きっかけ」が今後の自分が誰かに「きっかけ」を与える際のヒントにならないだろうか。このような思いから、本事業に参加し、結果他の参加青年や運営の方々から多種多様な「きっかけ」を知り得ることができた。

事前研修一日目では、参加青年が三人一組になって、本事業参加の動機をインタビューし合う時間があった。そこで、ある青年からは、親が中国出身で、幼少期から中国とのつながりがあったと聞いた。また、ある青年は、中学・高校時代に古代中国の歴史や思想を勉強してから中国に興味を持ち、今では中国経済について勉強するまでに発展したそうだ。さらに、講師の先生や運営の方々、懇親会やグループ活動を通して仲良くなった他の参加青年たちにもうかがうことができた。そこには自分が想像していた以上に多様な「きっかけ」があった。

意見交換会の班で気候変動を選択したのも、実はある方から気候変動に興味を持つ「きっかけ」をもらったからであった。ある日の勉強会で、砂漠化が深刻な内モンゴル自治区のクブチ砂漠で植林活動をしていた方の話を聞く機会があった。そこで、日本のＯＤＡ撤退やコロナウイルスにより、現在では日本人派遣の植林活動が中断していると知った。今、中国に渡航したくてもできない日本人が多い中、既に住んでいる私に何かできることがないか、現地の活動に参加できるのではないか、そう考えるようになった。そのため、私はこの意見交換会を通して中国の緑化・植林関連の課題への知識を深めたいと思い、気候変動班を希望した。

現在私がいる済南市は、日本人の数が極めて少ない。したがって、今後は自分の手で、多くの日本人に済南市に対して興味関心を持ってもらえる「きっかけ」を提供し、多くの方々に来てもらいたい。そのためには、具体的に以下の三つのことに尽力していきたい。まず一つ目は、済南在住の日本人の暮らしのサポートである。私は今年９月より済南市日本人教師会の会長を務めており、現在私を含めて６人の日本人教師がいる。定期的に教師会を開催して、お互いの問題を話し合うことで、教師たちが今後も不自由なく安心して済南に住み続けられるようにしたい。二つ目は、勤務先大学で学生と日本人の交流機会を創造することである。毎学期最終回の授業では、オンライン中日交流会と題して日本の友人や後輩を招待し、学生たちの日本語会話の練習をサポートしてもらっている。今後は学生が主体となって交流会を開催し、日中交流を継続・発展させられるようにしたい。そして最後に、専門である日本語教育にとどまらず、あらゆる分野における国際交流活動に取り組むことである。例えば、本事業のユースフォーラムの前後には、済南市外事弁公室から招待を受けて学生たちと山東料理動画コンテストに参加した。私は自宅で学生たちと２品の山東料理を作り、動画を出品した。料理という面からも済南の魅力を自ら宣伝できた。このように、今後も、例えば他の参加者の「きっかけ」からヒントを得て、あるいは意見交換会で交流した緑化など、ジャンルを越えて幅広く活動していきたい。

これまでを振り返ると、自分は運と環境にとても恵まれていたとわかる。大学時代、コロナウイルス蔓延前に運よく北京留学が経験でき、真の中国に気づき、興味を持つ「きっかけ」となった。そして現在本事業に参加するまでに至っているのである。今後は、そうした「気づき」や「きっかけ」が生まれる機会を自分から提供して、多くの人々の何かを変えることができる人材になりたい。

中国の青年の行動力を見て自分も

山口　幸輝

中国青年の行動力に触れ、いくつかの観察を通して感じたことは多岐にわたる。

まず、急速な経済発展や技術の進歩が中国の青年層に大きな刺激を与えているように感じた。この状況は、彼らが新しいアイデアや技術を積極的に取り入れ、実現に向けて動く原動力となっているのではないかと考えた。

一方で、社会への貢献への意欲も強く感じた。多くの若者が環境問題、社会的不平等、教育格差などの社会課題に敏感であり、その解決に向けた活動に積極的に関与していた。特に、技術やイノベーションを通じた社会的企業やプロジェクトが増加しており、彼らは単なる経済的成功だけでなく、社会的な価値にも日本以上に敏感なのではないかと感じた。

また、グローバルな視点も持っているように感じる。世界とのつながりがますます強まる中、中国の青年は異なる文化や価値観を受け入れ、共感しようとする姿勢が見受けられた。国際交流や留学、グローバルなプロジェクトへの参加者が多かった。

総じて言えることは、中国の青年層は多様で活気に満ち、社会への参加や変革への意欲を持ち合わせていた。これは国内外で注目されるもので、中国の強さの秘訣ではないだろうかと思う。

この事業では、デジタル化を観光の側面から紹介し、成果を挙げた。観光業界においてデジタル技術の活用は、観光体験の向上や効率化に寄与している。さらに、スマート観光の概念を導入し、QR コードやアプリを活用して観光スポットでの情報提供や案内サービスを強化した。これにより、観光者はよりスムーズかつ効果的に観光地を巡ることができ、デジタル技術が観光体験の質を向上させた。また、観光地のデジタル化によって得られたデータを分析し、観光資源の効果的な管理やマーケティング戦略を最適化することもできるそうだ。これにより、観光業界全体の発展がされたのは日本の第三次産業に大きな躍進となった。最終的に、デジタル化を通じて観光業界に新たな価値が生まれ、日本の観光を活性化させる一助となった。

この事業を経て、今後は所属する組織や地域などで積極的に活動し、事後活動で社会への貢献を進めていきたい。同時に、国際的なネットワークを活かし、国際的な問題やプロジェクトにも積極的に関与していきたい。異なる文化やバックグラウンドを尊重しながら、グローバルな視野を持ち、国際協力を通じて世界の課題に取り組むことで、広範で持続可能な影響を与えていけるのではないか。さらに、この事業を通して得た経験と価値観をもとに、組織や地域において積極的かつ継続的な社会貢献活動を進め、持続可能な社会の形成に向けて力を注いでいくつもりだ。

現在この事業に触発されて自分の大学で、産学連携を通じて、コンタクトレンズの回収活動を推進している。このプロジェクトは、産業界と協力して持続可能な環境への取り組みを促進し、同時に学生に環境意識の重要性を学ばせることを目指している。コンタクトレンズは一般的に使用後に廃棄され、大量にごみとして発生している。これにより環境への悪影響が懸念されており、産学連携の一環として、大学はコンタクトレンズメーカーやリサイクル企業と提携し、使用済みコンタクトレンズの回収プログラムを提案している。

このプロジェクトを通じて、自分は環境問題への理解を深め、自らの行動が地球環境に与える影響について考える機会を得ている。また、コンタクトレンズの回収活動は企業との連携を通じて、リサイクル技術や環境に優しい製品の開発など、実際のビジネスにおける実践的な経験も身についている。

この事業が自分にとって新たな挑戦のきっかけとなった。このチャンスを頂けたことに感謝したい。

他国との適切なコミュニケーションの取り方

湯澤　里桜

大学生になり、新たに何かに挑戦したいという気持ちを持っていた私にとってこの事業への参加は自分のコンフォートゾーンの殻を破るきっかけとなった。オンライン形式での開催であったが、海外の方とのコミュニケーションの取り方について再考する機会を与えてもらったと感じる。

まず初めに、事前研修では課題図書や著名な方々からのお話を聞くことを通して、中国についての予備知識を蓄えた。地理的にも近く、ニュースでも頻繁に耳にする中国について、私はある程度知識があると思っていたが、実際に専門家の方々のお話を聞くことで、目を向けたことがなかった中国の一面を知ることができた。近隣の国について自分がよく知っていると決めつけるのではなく、多方面からその国について学ぶ大切さを実感した。

現代はソーシャルメディアの拡大により、外国についての情報を受け取りやすくなった反面、虚偽の内容も多く含まれる。この情報の真偽を判別することが難しい中、高原教授に教えていただいた“原文主義”の実践が重要となると考える。画面上の表面的なことに惑わされず、自身のバイアスを取り除きながら相手国の実像を見る姿勢こそが、多国間の相互理解には必要不可欠であるということも教えていただいた。

また、中国青年との意見交換中は通訳を通してコミュニケーションをとったが、お互いの言語が理解できず共通の言語を話していないからこそ重要視するべきこと、それは私たちが相手の話を聞く態度である。事前研修の中でも表情や相槌をうつことを意識するよう教えられたが、実際に意見交換会を体験することを通して、より学んだことが具象化できた。中国青年が話していることは通訳を通して間接的にしか理解することはできなかったが、彼らの笑顔や頷きを見ることで中国青年の方々が意欲的であることが伝わってきた上、こちらが話していることを理解してくれているということや興味を持って聞いているということを確認することができ、安心感を抱くことができた。客観的に、そのような姿勢が相手にポジティブな印象を与えると知ったことで、改めて表情管理や話し方の抑揚など、言語以外の側面からのコミュニケーションの取り方の工夫が、相手への自分の伝わり方を大きく左右すると体感した。

班別の活動では気候変動班に属し、議事録をとるという役割を担った。この作業では、すべての意見交換会の内容を記録することは不可能に近いため情報の取捨選択を求められた。このプロセスを短期間内ですることが少し難しく感じたが、皆が意見の内容を記憶にとどめるために頼る議事録の作成は、とてもやりがいを感じるものであった。

一方で、日中間での違いを発見した。日本側は一つのテーマに対してグループ全員で一つの発表内容を作り、取り組む団結力の高さが顕著だったが、中国青年は個人で準備を行ってきたようで個々の力の強さを発揮していたように感じる。

今後、ここで得た経験から私は情報の発信に注目し、実践したいと考える。まずはこの情報社会で可能な限り正しい情報を吸収するためには多角的にその物事をみることが大切である。正面からだけの内容で自分の考えを確立させてしまうことは、ほかの暗闇に隠れているものに対して私たちを盲目にさせるため、とても危険である。だからこそインターネットやソーシャルメディアを日常的に使う私たちの世代にとって、目の前に見えることを鵜呑みにせずに、クリティカルシンキングを取り入れることが大切である。また、 現在大学で所属しているサークルでソーシャルメディアを運営しているが、その際にこの交流事業で学んだ知識を活かし、情報の正確性や画面の向こう側の相手がどのように情報を受け取るのか、あらゆる可能性を考慮しながら相手を傷つけずに理解してもらえる情報の発信を通したコミュニケーションの取り方をしていきたい。そして将来的には日本の魅力を海外に発信し拡散できる人材になれるよう精進したい。

日中関係と私のアイデンティティ

リム レイチェル シーワイ

私は日中ハーフとして二つの異なる文化的背景を持つことで、幼い頃から自分のアイデンティティについて悩むことが多かった。なぜ両国の関係は良くないのか、両方の文化に対して十分な理解や適応ができているのか、自分はどの国に属しているのか。日本に住んでいた経験もある私は日本人としての自覚はありつつも、どうしても中国人としてのアイデンティティとのつながりを感じることができなかった。大学で国際関係を専攻し、日中関係について学んだ際も、一面的な部分しか見えていないような気がして、より中国について知れる機会がないかと考えるようになった。

その後、以前プログラムに参加した友人より日本・中国青年親善交流事業「日中代表ユースフォーラム」があることを教わった際、私がこれまで考えてきたことをより深く学べる場面だと考え応募した。オンラインでの実施だったため、イタリアの大学院に通いながらも参加することができ、学びが多い時間を過ごすことができた。時間の制限もあったため、話したいこと全てを話すことはできなかったが、実際に中国青年と話してみると、お互いに文化に対する好奇心がある若者であること、そして中国の文化は自分が想像している以上に深いものだと再確認できた。両国の青年がステレオタイプに働きかけることで、お互いに対する誤解や不明確なことを無くすことができると考えている。

特に印象深い経験がいくつかあった。最初に、全体での協力と調整が求められるプログラムに参加したことで、リーダーシップの重要性を痛感した。私は文化班として日本と中国の文化を共有し議論するという経験があったのだが、本番での進行においては、班メンバーと円滑なコミュニケーションが欠かせず、課題の解決においてもリーダーシップの役割が不可欠であった。先方の青年とは初めて会う中だからこそ、うまく打ち解けられるか、何かハプニングが起きてしまうのかという不安な気持ちはあったが、事前から準備を十分に行ってきたこともあり、大きな問題なく本番を終えることができたと考えている。本番まで私は、チームの副リーダーとして、リーダーと他のチームメンバーとのコミュニケーションが円滑に進むように意識し、良い空気作りができるように力を入れた。そのためにもリーダーとの個別ミーティングを行ったり、コミュニケーションツールでメンバーへのフォローアップなどを行い、皆が積極的に参加できるような環境作りをしてきた。その後振り返りミーティングを行った際は、場の雰囲気が詰まった時や話題を振ることを意識的に行っていることを評価していただいたこともあり、私自身の目指す姿であった「中国と日本の良さを両方 PR し、お互いの国に興味を持ってもらえるようにする存在」というのを自分の得意な部分として活かしていきたいと考えている。

この事業を通して得た知識やスキルは多岐にわたる。プロジェクトマネジメントや効果的なチームワークの重要性はもちろんのこと、中国について持っている知識をより上げることで、リソースを最適に活用するスキルも向上した。これらのスキルは今後の目標においても大いに役立つだろう。

成果として挙げられるのは事業の成功だけでなく、チーム全体が成長し、互いに刺激しあいながら進化していったことである。「アイスブレイク」で使用した「共通点探し」など新しいアイデアの発展や、ミーティング中の問題解決において革新的なアプローチを見つけることができたのも大きな成果である。

今後大学院や地域での活動、事後活動においては、学んだスキルと経験を最大限に発揮し、持続可能な影響を与えていきたい。また、日中関係への貢献や社会的な課題への対応においても積極的に参加し、持続可能な変革を促進していく予定だ。今後は国際交流を通して日中関係に良い影響を与えられる存在としてより精進していく所存だ。

日中交流事業の学びと今後の活動

渡邉　花

１. 印象的な体験

今回日本・中国青年親善交流事業に参加し、事前研修から現在を通し多方面から『学』を得ることができた。

この事業への参加、そして取り組んだ様々な事象は今後経験することができない体験であり自分自身の価値観や経験値に大きな影響があった。まず初めに異なるバックグラウンドの日本人参加者と同じ目的で切磋琢磨できたことである。自分自身、大学時より国際交流に前向きに取り組んではいたものの、より国際交流に取り組む同世代の日本人参加者と出会い意見を交わすことで、自分自身についても再度考えるきっかけとなった。またこのようなオフィシャルな場で日本の代表青年として国際的な異文化交流ができたことは自分にとって一番の財産となった。

この正式な国際交流を体験することで、今後、自分自身が取り組む全ての事に強みとして生きることができる。その中で、異文化交流をする際の注意点や中国への理解を深めることができた。

当日の意見交換は私がイメージしているものとは少し異なるものではあったが、事前研修で学んだ事柄を存分に発揮することができた。しかし国際交流は国単位の考え方や個人の価値観等が入り混じり、有意義なものを作り上げることの難しさも痛感した。中国青年がどのようなテーマを話すのか事前情報としてもう少し詳細を知ることができていたら、日本側のアプローチはもっと良いものが提供できたかも知れない。大人になり仕事をすると、このような自己分析をする機会や刺激を受ける場所と出逢うことは少ないので、とても有意義な活動であった。

２. 学びと成果

(学び) 交流事業を通して自分自身の強みと弱みを再確認することができた。強みとしてはチームの中で役割を把握しサポートできたところである。チーム内で起きている事をいち早く把握し、何をすれば周りが作業しやすいのか、一歩先を考えて行動することができた。事後活動の際にチームメイトから自分の強みを言われたことで、今後の様々な活動の中でも自身の役割を発揮できるだろう。

その中でも、発信力や即戦力に少し欠けるところがあり、もっと意識があれば当日の意見交換でも発揮できたと思う。また個人としては、語学力に関してもこのようなオフィシャルな場かつオンラインの中国語を聞き取ることが難しかったので、その点に関しても今後よりがんばっていきたい。

(成果) 意見交換に必要な資料作成及び事前準備に関しては、自分自身の経験を発揮することができた。また社会人だけではなく学生との交流をすることも希少であり、自分自身の教え方やアプローチの方法がどうすれば伝わりやすいのか、学ぶことができた。日本青年のアプローチに関しては事前準備を行ったことで、当日はスムーズに進行することができ、中国青年とも交流をスタートすることができた。

３. 今後の活動について

今後の事後活動としては、今回の交流事業を通して得た学びを発揮していきたい。交流事業内ではサポートすることが多かったが、事後活動では自分自身が率先して国際交流を図る立場になっていきたいと思う。

また地域活性化の一環として、熊本と中国の交流会の活性化をしていきたい。特に九州はアジアとの距離が近く、貿易等含めてメリットが多く感じられる距離であることから、それらの外的要因を活かしていきたい。

自分自身に関しては、現在中国語を使用する仕事を行っている。今後も語学力に関しては引き続き勉強を続けていき、通訳を行えるように努めていきたい。

今回九州からの参加者はそこまで多くなかったので、今後自分のように熊本や九州から国際交流を促進する人材が出てきやすいような基盤を創り上げていきたいとも思う。20 代の貴重な時間を、今回このグローバルかつ壮大な事業に参加できたこと、自分にとって貴重でありしっかりと活かしていきたいと思っている。